

連作詩篇

魔の満月・第四部

紙田 彰

二

世界創造説コスモガニーの窈窕な原理に依れば端初には大地と暗黒と愛とが鍋底を形成する 無花果の成熟する二つの季節のように投擲された夜は戻らない夜の卵から生まれし者 汝の矢筈と炬火を用い生命と歓喜のバラッドを織り出そう 息子らを喰う巨大なる神クロノスの掌で肉の筒は葬られるべき運命に従い記憶のレトルトに転身する 夥しい眩暈 光輝あふれる朝が生贄を健康な緑の海洋に曳航する 朱塗りの船団が穏やかな入江に碇泊している 眩い白砂が黄色の頭花を散状に開いたハマニガナの叢を優しく抱く 幾星霜もの波に洗われすっかり丸味を帯びた流木や壊れて薄く塩を吹いた貝殻や所帯道具や玩具が散乱している 如何なる砌が青史を彩っているのだろう ルーン文字を眺め年老いた遺跡監視人は幸福な民族の住める北の王国ヒュベルボレナスの伝説を反響しているのか ビトスと称ばれる大甕に海洋文明は九十の諸都市を封じる 出納帳に

記されたヒエログリフや線文字に強い陽射しが照りつける。広袤とした天空を仰ぐがいい。自然の美しさよりも峻厳な時の器。神々の節理がうら若い乙女を破波させるさまを。処女懐胎とは女学生の自己分析に因む。眼球の中で焔が躍り幼児の頭脳は殺人現場を再現する。行文を扮飾しアンスリウムの肉穂花序のように仏縁を願おうか。母なる漆黒の象が長い鼻から夜を吐く。両性具有の守護神はひとときの慰安を口遊む。ボウの魔術の中枢をなす催眠の大通りに聳える拝殿。そこには微かな光を帯びると伝説の神託の紫色の文字を浮かび上げさせる魔鏡が匿されている。聖地ラドルの高敞な景観なによりも至る所を妖艶な気配で充たす七色の叢それに没薬に浸されたかのような芳香漲る空気。そして典雅な旋律を奏る清冽な微風。だが甘美な祝福に包まれた建物の中になんという不吉な呪いが蔵われているのだろう。魔されるような熱気の只中でエルドレは悲憤の暗礁にのりあげ葬られた記憶の波間を漂う。……神々の理に依れば在位中の王の胤裔が栄光ある宮殿で晨暉を迎えたとき永えの繁華を約束されていた都に恐しい不幸が見舞うであろう。ボウの豊沃な生命は失われ黄金時代が瞬くうちに鉄の時代へと転変する。なぜならばそのとき神々の御世は……”

ラドルの王位は世襲を宗とはしない。神々との取り決めに順じボウが二度蘇るごとに催される大祭典の競技会で四度連続して勝利の月桂冠を戴く強者を後継

者とする 王位継承者はラドル第一の美人にして最高の巫女である王妃を王との共有の配偶者として娶り即位するまでの期間を王の良き息子として振舞い王に与えられた快楽をともに頌たれる 王妃は義子を第三の夫とする なぜならば王妃は神々の正妻であり彼女を通じて王は神々の恩恵を浴し後継者は神々と王との恩恵と歴史に与るからである ラドルの民はこれを王家の三位一体と称す ああエレア 最愛の恋人よ ナクソスの市民ティサンドロスのように晴れ晴れしい誇りと昂る希望に充ちて四度にわたる勇猛のあの苦い杯を飲むことがなかったならば 胸はり裂けんばかりの非情な宿運の鉄に突かれエルドレは熱病の如き出産の悪夢から這い上がる 勿忘草の瑠璃色の花のように破滅は栄光の兄弟である 純白の雪が平らな野を蔽う アルカディアの地に踊る獣神のように 舞台装置は降雪を止め頭上に真青な空を映じる 骸骨の踊りと名称けられた無垢な雪原はいま燦々と輝き進む一条の真紅の帯によって二分される 巨大な岩の措えられていた避難所からエルドレの運ばれてきた北の際まで小川のように産褥の血が夥しい あの入口と出口とを兼ね備えたアストロラビウムは既に妖婆たちの棲む深いクレグアスに転げ落ちたのだからか もう跡形もない不思議な巖を通じエルドレに如何なる変化が齎されたのだから 夢の効果は生理作用にまで及ぶのか 風の時刻に潮の香が仄かに寄せる 潮下帯の岩場で

海老刺網を用いて獲られた海老や蛸の種属である体長数メートルの巨大な蟹をまっ赤に茹で大味を加減するためにタルタルソースや甘酢また酢醬油で食す海の羊肉といわれる鮓や海藻を化粧品として撰る榮螺を殻から取り出す 柔かな鰓を味わいこりこりした鰓を頬ばる 妙姜を箸休めに添えるのもいい 辛口的美酒をたらふく吞んで酩酊した高所恐怖症の男が千鳥足で浜辺を散歩の途中ズボンを破る 熟した柿は鳥の格好の餌だ 山道には風に飛ばされた蜜柑が散らばりその中を杖に縫る中風病みの百姓爺がゆっくり登ってゆく 晴天の藪に蹲り詩人は年毎の鍾りを垂らす 蘭の奇怪な花卉から発せられるくらくらする匂いの中で青い蝶の標本が見世物小屋の轆轤首の女に重なる 漆喰でできた飛天のように風呂場で転倒する盲目のモーモスは八方睨みだ 釣鐘のような巨根に幸あれ ボルボーイ・アポロンの馭するチャリオットの轍を残した蒼穹には苦行が待つ のだから 藪睨みの狂犬に出会えば運命の女神モイラの鉄に追い駆けられる 呼鈴が鳴れば毒入りのコーヒーが待つ ええい栄光などは名工ヘーバーストスの造る拍手係に任せておけ 六芒星章の北端に位置する未踏の帝国その屹立する山巒の頂を仰ぎエルドレは身を切るような嵐に裸体を晒している 寒さなど微塵も感じていない あの生体実験によって与えられた新生の肌サドラの聖なる力が雪原の底冷えを遮断している 貧寒とした古代樹木の裸木が露

蒼と生い茂るさまを左に俯瞰し右側の狭谷を覗くと丸々と肥え太った灰色の小動物が所狭しと駆け廻っている。二つの川の合流している谷底がエルドレの直下に見える。そこには北壁に向かって人工の水路のように青い水が湛えられ対岸に挟られている小さな峡谷から金色のきらきら耀く光が水路に射し込み漣がその波長に応じて小刻みに燦いている。そこはコーキュートスヤレーターの河のように忘却と嘆きの岸辺なのか。また老衰寸前の国家間における紛争の膠着状態が生んだ運命の糸口に至る汀なのか。エルドレは此岸に霞のように籠気で脆い小舟が繋がれているのを見る。疾風が走る。飄忽にして冷気が背筋を噛む木立ちを根こそぎ揺るがす烈風。エルドレは切り岸を降りようと決める。青銅の衛士から奪った剣あの幾多の幻を血に染めた短剣を取り出し胸や太股の表皮を薄く剥ぎそれで長い紐を作る。サドラは強靱なコステイに変貌する。槓杆に驚の姿が彫られ大粒の真珠が象嵌された短剣を風化層の固い岩に渾身の力を置めて突き刺す。紐を柄にしっかりと結えつけると確かな足場を定めながら徐々に岩棚へと降りる。そこから水路に向かって突き出た庇にさらに紐を巻きつけ小崖の底に辿り着く。きりたつ断崖の険しい岩肌へべりつき崖下に達するのにどれほどの擦傷を要したろう。血はつきものだ。流せるだけ流した方が得策である。情けを知らぬ渡し守のカーローンならば百年の流血も渡し賃にはならぬと

いうに相違ない。エルドレは自ら剝奪した肌が瞬間の微熱のうちに再生しているのを知る。海藻を甲羅に植えた磯屑蟹が驚いて転石の下から這い出し緑色の足を忙しく動かす。潮溜りに棲息するガンカセや刺胞に猛毒を匿すイラモに用心しながら波食溝や溶食穴を跨ぎ越える。大赤藤壺がまだ濡れている波食棚の一带をリトマス紙のように赤変させる。水中には甘海苔や袋海苔などの紅褐藻類が揺らめきウミノトラウオやクロソゾが樹木のように黒い枝を強調しさながら大森林だ。岩に固着しとぐる巻く白い大蛇貝や岩蔭に貼りつく灰色の斑模様のある雲形海牛。エルドレはこの水路が入江の延長であることに思い当る。するとあの洞窟は海に通じているのか。小舟は波食残丘の尖った岩に繋がれている。食欲を偽砂堀虫や長い触覚をぶら下げた船虫が触先からすばしっこく鎖を伝い岩礁に這い上がる。エルドレは舟に乗り込み金色の光の洩れる窟穴に向かって漕ぎ始める。小舟はいま入海の水路を迂りエルドレを外海へ連れ出そうとしている。透明な水底には鮮紅色の鯉冠を掲げる茨簀や砂蚕が戯れその頭上を擬死した黒海鼠が白濁した粘液質のキュービエー管を排出したまま流れている。アニアオサの群体が柔かな葉を掲げ岩盤の全体を緑の草原に化す。小舟は静かな波の下に棲む生物たちの上を音もなく迂り洞戸にさしかかる。成長した牝猿の尻のように穴の上辺を境に水分を含んだ焦茶と濁いた赤い岩が露出する。溝

潮のときにこの通廊は海水で閉ざされるのだろうか エルドレはひんやりした冷気をおぼえ暗い穴の向こうに明るい光と青い海が続いているのを知る してみればシュブレীগデスあの打ち合わせる岩の如くウエヌスの愛する鳩を捧げねばならぬのか 三日月湖でボート遊びを楽しむ恋人に帰還を命じる拡声器の声はオールドミスの預金通帳のように深刻である ヒマラヤ杉の樹皮には亡霊の顔写真が貼られている 貸自転車で沼沢を一周する 乳房と尻の区別がつかない 森の彫刻館で炎の舌が水晶を舐める 少年たちは弁当を食う合間に薄暗い木蔭でキュロットから青白い性器を取り出し自慰に耽る 青春の青っちらさを犯すのは格別の快楽である 猿たちも衆人環視の縄張りでは極度に神経過敏だ 赤ん坊が放り投げられる 熱帯植物園の不透明な円蓋の中で尾の長い鳥や王冠を戴いたけばけばしい鳥が布を裂くような悲鳴をあげる だが船酔いしない者は航海の間中ひどく退屈だ 夜汽車に揺られ酒を呑んで眠ると目的地の真夏の暑光が疲労と頭痛をからからに乾燥させる 山の中腹に立つ朝市は雨の恩恵によって幻の文体をもつ 浜辺で襦袢を纏った漁夫が蠅のたかるにまかせた新鮮な幸を大きな包丁で叩き割る ぽっかり口を開けた洞窟を抜けるとエルドレの眼前に感銘すべき自然の造形が現われる おお睦目すべき絢爛な光の宴宴海は望郷の如くエメラルドの華麗な夢を擁くのだろうか 虹のように変化する

波はゆるやかな優しい稜線を描き小舟を迎える 弓なりに海洋を支える高い陸地はオリブやオレンジの果樹に埋もれ水平線と交わる所まで明るく豊かな緑を燦かす 飛沫に洗われる鋸切状の岩壁 屹立する黒い巖 飛石のように連なる小島 サップフォアが美しい裸体を投げ出したレスボスの険しい断崖 彼女の歌はセイレーンの甘美な咽喉を介して何処へ流れてゆくのだろう 三叉の戟に掻き回され純白の潮を吐く渦が無数 翼をつけた少年の失墜した海よ 琥珀のように滑らかな沖合はありとある愛の悲劇を呑み込み静かなうねりを永却の涯まで繰り返す うねりに抉られた水晶球に世界の歴史は封入されているのだろうか 波頭に勢いよく首を突っ込んだ海鳥が笛のような音を発し青い空に舞い上がる 太陽は中天に座し燦々と豊かな恵みを注ぐ 緑の海洋はディオニューソスの祝福を浴びまろやかな欲びにあふれている 一筋のリボンのようにしか見えぬ赤道が生命の鮮血を与えるように あの百人の武將が乗り組んだアルゴ1号の如く豪快な櫓に銀白の帆をはためかせ三層に及ぶ櫓の並び船首にユーピテルの雷霆を銜える大鷲を裝飾したガレー船が沖の方に碇泊している 威風堂堂たる船に向かって両手を差し伸べ合図を送るが何の反応もない エルドレは勇ましい船に向かって小舟を進める だが近くには大きな渦が巻いている 徐徐に渦の力に吞まれてゆく 小舟はぎしぎし軋む 筋肉はいまにも千切れ心臓

も破裂寸前である。小舟は落葉のように渦の周りを回り始める。エルドレは抵抗を止め力を抜いて深呼吸する。大きな弧を描く間に力を蓄えるのだ。ほん一周して小舟の軸先がガレー船に向いたとき思い切りよく舳を渦の外側にのり出させ渾身の力で素早く櫓を操る。すると小舟は渦の求心力の範囲からするする抜け出て物凄く速度で目標へと直進するのである。禍いの渦巻は呪いの赤い泡を吐く。エルドレは小舟を舷側に漕ぎ寄せ大声で到着を告げる。叫びは海洋の静かな拍動の中に吸い取られる。如何なる返答もなくあの生命の動悸すらもない。赤ん坊と三人の女が見当れば紛れもなく幽霊船であろう。エルドレは甲板に上がり橋頭や櫓の辺りに人影を捜す。艀口をあけて埃や黴の臭いのする船室にも首を突っ込む。この船は無人なのだろうか。船艙に降りると崩れかけた灰色の骨が散乱する。薄暗い船腹は棺桶のように不吉な空気が滲んでいる。おお千年の時間ともに朽ち果てた密室。上甲板の船橋の奥に船の全貌を見渡せる部屋がある。くすんだ玻璃窓が四方に繞らされ中央に描えられた上等の黒檀製の文書机の上には古い羊皮紙に記された地図が展げられている。上方にコの字型の陸地があり下方に細長い島が横たわりそれらに囲まれた海には無数の群島が描かれている。エルドレは東方の陸地の小さな入江から南方の細長い島の中央に向かつて朱線が画かれているのを見出す。始点は“ベルガ××”と読み取れる。

あの古代の港 アテーナの像を奉じた大祭壇と二十万巻の蔵書を誇る図書館なによりも黄や淡紅色の可憐な花バベル草の短い茎を羊の背に植え文明の爛熟を謳歌した都 部屋の間隅に白木造りの吊棚がある そこに鋭い輪郭をもつ灰色のミニアス陶器や格子文棘文の上に純白の花飾りを咲かせたクラテルが並ぶ清楚なコンソールテーブルの上に双耳杯や家鴨を擬した水晶の水差しが置かれている エルドレは甲板に戻ると海洋との長い交渉で赤く腐蝕している錨を引き上げる するとどのような力が作用したのだろう 三層の櫓が勢いよく海面を叩き舷窓から船乗りたちの唄が溢れ白い帆は風を一杯にため込み素晴らしい船足でこの船を運ぶのである エルドレは周囲を見回して驚天する 誰もいない筈の船に一瞬にして数十人の男が現われる 逞しい躰を陽光に晒しながら忙しく走り廻っている 一人の水夫が櫓見張所からすると二り降りるとエルドレに向かって駆け寄る 茫然としたエルドレは為す術もなく佇む エルドレを氣遣う者ともない だがその男は視線を合わせることもなくエルドレの躰が空気であるかのように擦り抜ける エルドレもまた確かに船乗りを擦り抜ける 否確かなものなどありはしない 一切は一炊の夢まさしく眩暈のうちにある これもまたあの灼熱の国の贈り物サドラのなせる神祕の技であろうか あるいは自ら幽境に徑い出た結果なのか 見張りが航海の順調を告げると屈強な

男たちが甲板に勢揃いし車座に腰をおろす。十数頭の山羊や数十頭の鶏が船底から引きたてられる。十箇の酒樽が転がる。全身剛毛に蔽われた男が大きな刀で動物の首を刎ねる。甲板がその血を吸ると酒盛りが始められる。堅琴が潮の甘い香に誘われて武士たちの長い鞭さの唄を奏でる。真紅に熟れた太陽を指し、鷗の群が翼を燃え立たせて飛ぶ。古えからの作法通りに漣が船べりを叩く。物質の記憶はプラトーン立体の如く壮麗である。錬金術師の登場に始まり、嬰兒が鼠に噛み殺されるまで時の嵐は悲哀そのものだ。数十人の暴漢に袋叩きにされる。叩き伏されて婚姻届に捺印する。暁の鏡の中で健康な髭が顔を包む。風邪を拗らせ再び電話魔が出没する。お白粉で生活を塗たくる。鮫鱈の生胆を賞味するたびに失恋の涙を零す。泣き虫が片眼のジャックを捲りワイヤードを示すと小切手が乱れ飛ぶ。街路で器用に脚をあげ跳躍しながら頭上で腕を交叉させると嫉妬深い女から解放される。眼れっ面のモノマニアが哲学者は死んだと叫ぶ。栓抜きで盲腸を手術すると死者は死につつある者として蘇る。墓は空っぽだ。さあ婆やよ寝台を暖めなくては。弟を伴い母親の寝室に忍び寄るエレクトラよ。おまえはもともと何処から来たのだ。薔薇色と灰色の絵によって要約せよ。ヴェスタ神殿の前にある斜面になった公園を抜けて道化たちの弾いた白球が転がる。街はきらきら輝く太陽の下に果しなく続く紙片に変わり人々は蟻

のように右往左往し自動車はあらゆる方向にぐるぐる回り遙か彼方ではベルが鳴り響く。期待は期待する。人体に由来する原初的物質の臭気が全会葬者をすっぽり包む。午前一時が鳴る。やがて列車は出発する。小肥りの大道具係が空中ブランコに跨る。おまえは何処から来たのか。船倉で催された黒弥撒は青年を破滅に導く。縮毛を掻き上げると扁平で青白い耳朶が現われ女給たちの失笑の的になる。牧人の提瓶に因むデパス・アンフィキュペロンは三半規管を内蔵した歴史の艇子であろうか。崖から身を投げると半索動物の巨大な糞が迎える。生ある化石三味線貝の触手がつれ汚染された鎮守府の夜は長い。聖ヨハネを俟つまでもなく死者たちは死につつある者として蘇る。白鳥を抱くリーダーの産む卵こそ彼らを庇護する船霊である。膨んだ帆の周囲でちらちらと赤い火が揺らめく。鬱蒼たる深山の樹々に生る疣胡瓜の形をした蛭のようにいまにも首筋や肩や脇腹に喰いつこうとして。一日交代の生命を消費しようとする船乗りたちの顔に貼りつく双児座の鬼火。ブトレマイオスの“四書”テトラビプロスは航海の神秘を開明する底本である。ピトルピウスは“星位によって人の運勢を占い過去と未来をいい当てる術はカルデア人の計算法に委ねられる”と述べている。魔法陣や友愛数など東方の文明を載せた船の中でアルカナは奇怪な姿を呈する。亡霊たちはしこたま酩酊し武士の栄光を甲板に吐く。如何なる予言と命

教法が定められているのだから 鰻の如き腰巻を払い退け丸裸になつた彼らの毛穴から酒気を含んだ汗が発せられ噎せ返るような獣の精気を辺りに充溢させる 赤く染まつた眼がふわふわと漂う 巨神プロメテウスの息子デウカリオーンの手で放たれた瓦礫は骨と肉と血管を頭し荒々しい海の男を創造する エルドレは跳ね廻る彼らの躰を通過しながら舐先の方に歩む 物質と物質は混濁しない エルドレは幻感であるが故に彼らから見知られることはない 男たちは鉄板の上に不吉な光を帯びた炬火を並べ火渡りや鉄火術や熱湯術を試みる 円陣を作り剣の技巧を競つたりレスリングに興じる 威嚇する太い唸り声や罵声や見事な技に感嘆狂喜する叫びで喧噪はますます絶頂を極め橋の天辺から布張りの飛行器巧を背負つて滑空する者まで現われる 両方枕でこのちらちら赤く浮游する炎を眺めながらエルドレの胸中に不思議な安堵が訪れる 一つのまにやらひたひた寄せる潮騒が聞える 度胸を誇つた船乗りはそれぞれ対になつて次第に物蔭で身を横たえる ひっそりと静寂が船を蔽う 唾液や汗のたてる音が徐々に明瞭になる 微かな呻きが聞え出す 次第に甲高い吠え声になる 逞しい胸と胸とで銅のような腕と腕とで互いを抱きあい虚しい寂寥の賜物というよりも第一級の健康の証として男たちは肉を賞味し合う ソドミイの幽霊 悉く青史を培つた者の武勲の誉よ ポルポイ・アポロンの愛でし美形の少年た

ちを可憐な花に転身させるローマンスとは異なり巨大な股巾着を突き立てて天球を揺るがすような祝砲を打ち上げる。漿液は天の辺と海の辺とを結びつけ濃濃たる黒雲を湧出させる。神々の如き猫撫声は洩らさない。太い咆哮をあげ永却の苛役を強いられたシーシュポス同様に神々を悪様に呪いエリニユスの庇護の下に潰神しようとする。嵐を擁する黒雲の奥で船首に括られた雷霆の如く刺しい閃光が発せられようとしている。エルドレは微睡みながらラドルの闘いの日々を反趨する。あのロリエヤオリーブの枝で編まれた勝利の栄冠を四度克ち得た日のことを。半歳の乾燥期の間を白無垢の衣を纏い深い眠りに耽っていたボウの叢がひととき華麗に輝き新たな生命の歡喜を呼び戻しうねうねと波打つ日に聖地の若者は皆一斉にあの眉間の広場に群がる。競技会はオルリー公の腎水が新しく準備された勝利の冠に注がれるのを合図に開始される。ギムナシオンやパライストラで十箇月みっちり訓練された若者が一同に会し凝灰岩の切石で造られ深い大摺鉢の威観をもつ競技場で各々の技を競う。ヘルメスや名手ボリュデウケースの加護を受け少年の頃から拳闘に素晴しい素質を顕したエルドレは並み居る強者を打ち倒し四度目の覇を目前にして溢れる野心に胸躍らせる。最後にして最大の呼び物ついには王の後継者が決まるかも知れぬという期待を抱いて聖地ラドルの老若男女は大理石で造られた観覧席から固唾を呑んで見守

る 決勝戦に勝ち残った相手は王の第一の忠臣ソロドネスでありその戦歴を物語る如く鼻が潰れ耳を剥がれ片目を失い頑強な躰を持ち上背や重量などは優にエルドレの倍以上もある豪傑である 歓声と拍手が湧き起こる エルドレはセスタスのついた革皮を甲に巻きつけ闘いに挑む ふうと息をついて出る陰性の中音 次第に獐狂な獅子の如く吠え始め巨軀をぶるつと揺すってソロドネスが突進する エルドレは臆することなく体形斜めに構え躍りかかる大男の脇腹にするりと這り込み左足にふわり重心を落とすと左肩を内側に捻りつつ思い切りよく左腕を顔面狙って突きつける 人々の鈴生りの視線がソロドネスのその醜い顔に注がれる 忽然と起こる不思議な笑い 打たれた方は躊躇めきもせずやりと唇を綻ばせ嘲けるような陰性中音の笑いを洩らす 眉間の辺りがびりびり痙攣したかと思ふや躰を大きく右に回転させながらエルドレの腹に左拳ですしんと一発喰わせる すかさず嚴の如き右拳を顔に打ち下ろす 絶えず笑いを響かせ乍ら分を盗み寸を奪い乱打する ひゅうと鮮血が進る エルドレの頬が金属鎧の打撃によって裂けてしまうのだ 白い腕の美しい娘たちの一団から絹裂くような悲鳴が飛ぶ 漆黒の守護者の長い鼻が波打ち白虹貫日の如く鋭い牙が天を突く 汗と血潮に塗れ男たちの裸体は鈍重な光沢を帯び乱れた呼吸の合間にびくびく引き撃る筋肉が殺氣騰々として異様に美わしい 観衆は息を吞

む 腹の底に股股と響く咆哮が激昂の前兆あの静謐の一刻を齎している まるで絶頂期の快楽を享受しようと エルドレはソロドネスの一方的な攻勢に屈するかのようじりじり爪先で後退さるが相手の躰が油断のあまりゆらりバランスを崩した隙を見て取ると間合いを維持していた左腕をすすっと伸ばしロングフックを放ちすぐさま肘を直角に曲げ上体をくるりと捻りながら右挙で摩滅な単眼巨入の顛顛を殴りつける どろりと赤い液が零れる 相手は反撃に怯み慌てて拳を上向きに構え杓るようにしてエルドレの腹を扶ろうとする 接近戦が開始されラドルの人々は一斉に立ち上がる 興奮の増埒に陥る 口角泡を飛ばし脚踏み鳴らし両手を振り上げ怒濤の如く勇者の名を代わる代わるに喚く ボウの変幻自在の叢が驚き宇宙に舞い上がる エルドレは左手でソロドネスのアップカートを払い退け顔面に迫るパンチを上体ぐいと外らして交わす そうして相手の懐深く飛び込むと腕を貫けとばかり左ストリートを鳩尾に減り込ませ途端にふっと浮いた咽喉元に渾身の右アップバーを炸裂させる オルリー公が上気した眼を輝かせ儀礼用サーベルを鳴らして躍り出る 群衆も歓声をあげて観覧席から雪崩てくる 紅蓮に染まる放物状の帯が空中に架けられる 強烈な一撃は頸を無残にも打ち砕きソロドネスの巨体を仰向けにゆっくりと宙に漂わせ大きな地響きとともにボウの叢の中に沈める 意識を喪失させながらこの

強者は人差し指を伸ばした腕を天に上げ敗北を認める。エルドレは汗と血と泥に塗れた逞しい好敵手の躰の中心で愛あけ果実のように柔く弛緩した逸物に精一杯の優しい接吻を与える。王妃エレアは頬を蔷薇色に染めてこの若い勇者に熱い眼指しを送るのである。天幕を裁断する玲瓏な光がエルドレの微睡みを破る俄かに空は掻き曇り凄じい稲妻が縦横無尽に走り廻る。暗黒の帳を裂き鱧を掠めた青白い稲光りの只中に一糸纏わぬ逞しい肢体も露わなアルゴナウテースの裁尾の姿が照し出される。眩い閃電が甲板で緩やかに偏光し口淫する綺麗な咽喉の曲線を映す。ごうという音響とともに進む二叉に眩れた黄金の火箭が船先に注ぎ深い接吻のふ厚い唇から滴る唾液を燦かす。その向こう間に擁かれた行手を見ると光の波に洗われた蒼白な鳥影がくつきり姿を現わす。轟き渡る雷電は激しい嵐を湧出する。白帆は千々に引き裂かれ荒々しい高波が船を叩き伏す容赦なく降りしきる豪雨が甲板に溢れる。帆樫がみしみし不吉な叫びをあげる。と天辺で水夫が翻筋斗うつ。自然の悪意に翻弄されて船から振り落とされる。大沈没寸前のガレー船よ。乗組員のほとんどが荒海に深く身を任せようと我がちに宙に躍る。数十人の男の投身の姿勢よ。このまま海に吞まれてなるものかとエルドレは巻上げ機の赤錆びた歯車止めを外す。からから芯棒が音をたてて回転し深い海底に君臨するポセイドーンの胸めがけて錨が落下してゆく。夥し

い光の乱舞の紡ぎ出すありとある風景は如何なる誤植に匹敵するのだろう 運命の糸は世界を転変させる 強健な肉体を宿しながら哀れにも海の藻屑に成り果てんと宇宙に踊る武士たちは様々の投身の姿勢のまま燦爛の炎の如くぶつたりと掻き消える 亡霊は光の彼方に帰還する 我が主人公“物質の幻惑”は誰に夢みられてゐるのだろう エルドレを迎え入れる帰還の途とは 時を一にして天を蔽い闇黒の海洋を専制支配していた雷雲はみるみる退き一瞬のうちに水平線の彼方に没する ヴォワイヤンにとって一瞬の眩暈こそ最高の至福である おお如何なるカルマとその秘法が彼らを律するのか 暖かな陽光が充ち溢れ波は静かに迂り縁に圍繞されたおだやかな海洋が蘇る エルドレは目前に迫る島に向かおうと滑らかな琥珀の海面に優雅秀麗な弧を描いて飛び込む 船首に金箔で記された“蒼白の勝利”という銘を見ながら 飛沫が虹を織り清涼な水が快い 蛸や烏賊や飛魚が鮮かな技手を切るエルドレの白い裸身に添って泳ぐがそれ以上付度することなく潮の流れに従い離れてゆく ムーサーの九人の女神なによりもエウテルペーの宝石箱をあけると金属の表紙で綴じられた“靈魂の受胎”が発見される 外套と帽子を纏って灰色の町に消える 扁桃型の醉眼を瞬かせ交番の前で悪夢を吐き徐ろにズボンを脱ぐ それから清晨の明るみに向かってマラソンを始める 夜にはまたまた深酒し肉離れだ 柀檀の香を薫じる

口髪を撫で女兒の華奢な膝に触れて屈み込むと白亜期の葉紋を宿した化石が手に入る 山奥の小さな泥沼で塩辛蜻蛉や鬼蜻蛉が尻尾を水面に叩きつける 瓢箪池でずぶ濡れになって愛した少女が歯切れのいい声でイシスとホルスの来歴を請じる おお忘却を冀う神々の連禱 風籟のように他愛ないアグリッパよ 神父が聖地巡礼の旅からマントを持ち帰る 少年記者はバスに乗ってこの不審な男を尾行し三番目の停留所を過ぎた辺りで額に虹の雫を頂戴する 薔薇の花を頭に咲かせ國にもうひとふんばりさせようエルドレよ 海鞘の筋膜体で北の楽園を生食する 翼砂蚕が発光すると内臓に毒をもって黄金時代は皺苦茶になる 怒鳴りつげると白眼を刺して抜衣紋だ ドアをばたんと閉めるともはや生命の片塵すらも残っていない 机上の憫懐に接吻すると惑星間の真の虚空を横切ることさえ可能である 進抄すべき詞藻に足を取られて諛言を呈するなど妙忽なことだ 洗濯女の狂った瞳孔を覗いて母親の背に隠れる さし乳の女が乳石を献上すると取るに足らない瘦削な老婆になる 殴りつけると半身瘡蓋を貰い翌月の水浴びは苦痛だ 雑草の生い茂るスタディオで涸いた野犬の糞を蹴る 踊るつもりなら肉の毒素を取り除かなくては 釣しんぼりを着て酒瓶片手に散歩しよう 満月の下で女に平手打ちを喰うから ヒステリックな罵声と一緒に突き出される包丁 おお海に臨めるオベリスク 階段の左右に大理石で彫られ

たAからBまでの巨大な文字 赤条々の艶潤なんか口づけに清涼水を含ませて
さよならだ 沛然たる迅雷に打たれ乾坤は健全なアムプロシアを育む リンネ
ルの縁なし帽を冠るほっそりした美女と濃紺の肌に吸いつく薄絹を着た美男子
の和合する水の都あの太陽と親しい叡智の王国は何処に匿されているのだろう
未練たらしい詮索など法界愒気である 審美的な考古学者が氷柱を抱くとすぐ
さま融けだしその流れを這い上がる藁にひんむかれ悲惨な最期が訪れる 魁然
として死の十全の保証を受けよ おお国家の鹽は足で一杯だ 黒い岩礁のよう
に連なる海岸から突き出た岬の下に到達する 葡萄酒色のなだらかな海原に囲繞
された美しく豊沃な島 九十の諸都市と最古の海軍の眠る土地よ 入江を中心
に放射状に拡がる最大の町に至るには獅子の彫刻が守護する城門を潜らねばな
らない エルドレは皎々と燦く太陽と乾燥し透明な青空を眺めながら濡れた躰
を休めると屹立する岩山に狭まれ屈曲した溪谷へと向かう 蒼蒼と生い茂る樹
樹が撓むな枝を挽垂れて行手を阻む場所を通り抜け赤褐色の岩肌の迫りくる狭
隘な道が途切れるとぽっかり目の中に低いなだらかな丘が薄墨色の重なり合う
建物の影を載せて飛び込んでくる 丘を囲む半ば壊れた城壁を過ぎ広い埃っぽ
い道が拡がるその向こうに糸杉の慰安の木立ちに包まれた墓地が続く 遠征か
ら帰還し祝宴の後に殺されたと伝えられる英雄たちはこの静寂な眠りの園から

追放され海泡とともに消滅した亡霊たちと等しい宿業に魅入られ何処を徨っているのだろう。微風が小さな旋風を織り出し軽々と朽葉を舞い上げる。歴史の眩きが侵入者を追いたてる。ゆるやかな起伏を登り詰めると斜面一帯にオリブや葡萄畑がむんむんと緑の息を吐く。道の尽きる辺りでは爽風に針葉を翻し陽光の銀色の矢を射返す松の樹々が両側に並びその奥に高い主門が聳える。巨きな切石を丹念に積み上げた迫持送りの門の上から鬣を逆立て爛々たる眼光をもつ獅子の浮彫が入城する者悉くを睨みつけている。だがエルドレは誰に出会うこともない。人影もその気配もなく森閑とした城市の中央に十三メートルの高さに及ぶ大円堂ががらりと鐘を鳴らしている。幻想は幻想を惹起するとはいえ果して三層オールのガレー船の出来事と逆の事態が進行しているのだろうか。だとすれば道広く民を迎え蟻塚のように栄え黄金に富む都市は素裸のエルドレを夢見ているのだ。大円堂の外壁には戦車に騎乗した戦士たちの狩猟する様子が描かれている。円堂の内壁には海洋文明最古のゴルティンの法典が繞らされ内部の数々の部屋には黄金のマスクや胸甲や岩水晶の頭飾りをつけた鍍金の王笏や黄金の楨杆に黒真珠を象嵌した見覚のある宝剣や諸々の美麗な容器や装身具や飾り帯に数百枚の黄金小板やら黄金の匣などがぎっしり蔵われている。物質の栄光は死者の安置された地下深い奥津城から放たれる。グルシアの蛸壺

に海洋民族の足が詰められる 凍石で作られた角環には栄誉が盛られる “キ
クラデス諸島とエーゲ海に面する本土のうちスニオン岬はアッティカの地から
つきでている” と誌オギリシア周遊記の著者ならば雷をも轟かすメアンダー文
の野に飾られた丸天井に “文明の源と未来は楕の中につきでている” と書き記
すだろう エルドレは背中にひやりとしたものを覚えるとそそくさとこの宝庫
を後にしてその裏手で絢爛と咲き乱れる広い花園に赴く 大地母神ケレーヌや
サテュロスの祝福を受け花神フローラの戯れる苑 意を尽し巧を凝らした未曾
有の数の花壇が大自然の統一とともに豪華無類の饗宴を演出している 薔薇や
ヘリオトロープが甘い香りを漂わせ石楠花やデージーが桃色の花弁を小刻みに
顫わせる 天帝の花といわれる瞿麦が鳳仙花の中に混って可憐な頬を覗かせる
ジギタリスや飛燕草に囲まれて乳白の百合が眩い 虹の如きアイリスの花びら
が宙を舞う その下を葡萄酒やミルクを湛えた清澄な細流が横たわり月桂樹や
橄欖の枝を洗って飛沫をあげる 孔雀が舞い降り沐浴する清楚な白鳥と黄金の
林檎を競い合う 季節外れの南天の実が浮かぶ 瑪璃や角礫石などの素晴らしい
光沢をもつ小さなフィーレや置石が小川沿いに点々と並ぶ 黄色い蜂蜜を滴ら
せる椶や白い粉を吹いた扁桃の木蔭に泉が湧きその周りを囲んだ半円形のエク
セドラもある 粗面岩で舗装された遊歩道の彎曲する辺りに白赤緑黄の化粧煉

瓦でできた尖塔が聳える 煙立つ湯と涼しい水の流れも清いと謳われたアルティスはミルトの叢林の向こうに括がる “聖なるアルカディア人の純正なる者”の奉納した神像を入口に備えたデルフォイやまたフィディアスの破風彫像をもつオリンピアにも匹敵する神域 エルドレはその広袤とした景観を一望しながら灰青色で所々に錆色がかった断崖の方に向かう 既に庭園は尽き左手に望める入江に白い帆を萎れさせた船が碇泊している 平坦な道を更に進むと右手の方に二万数千平方の丘が隆起している エルドレは丘の斜面に不思議な形をした宮殿を認める それは四つの大きな建物が屋根続きに相接し増改築を含めて時代の異なる幾つもの建物が重層しているかの如き外観を呈している エルドレは迂曲した道に従って丘の中腹に登り宮殿の南側に至る 宮殿は紺碧の大海原を背景に右側に緩かな丘を遇らい繊細華麗かつ複雑奇怪な姿を現わす 周囲には簡単な小宮殿やロイヤル・ウィラや高僧の邸が建てられている エルドレはそのうちのひとつ宮殿に続いているカラヴァンセンライに入る 壁面には大きな鏡が嵌め込まれ中央には水晶を鑲めた雪花石膏の池が設けられている 粘土で作られた導管が丘の頂から清新な水を運ぶのである エルドレは涼しい水を浴びる なんと甘い甘い液体よ 鏡に裸体を映すと青味さえも帯びる 幅五メートルに及ぶ大階段が正面に伸びる その両翼に下細の柱が頭上高く並ぶ エル

ドレは階段を昇り切ると宮殿の広く長い廊下に至る。陽光は弱まり奥は一段と薄暗い。天鵝絨の紫色の絨緞の光沢が闇に呑まれる更に向こうでちらちらと妖しい光が舞う。通廊が中庭と西玄関に分れる辺りでひたひたと床を這う音がする。光が左の方に消えるのを認めるとエルドレはなにもか魅入られてもしたように陶酔の面持ちで後を追う。二股になった所から左側は下り階段になる。直角に旋回する階段の片側は壮大な木柱が明層を作っている。このとき不思議に軽快を気分になる。あの清水の魔力に依るのだろうか。階下に降りると角杯を抱えた暗紅の肌をもつ廷臣たちが迫り来る。だがそれは数千年もの間を壁の中で暮らした影なのだ。明るい光が差し込む。玄関から外にあの大円堂の聳える丘の起伏が見える。エルドレは悪かれた如く華やかに彩られ四階までうち抜く柱廊の階段に引き返す。吹き抜けになった柱列の間から小さな庭が覗く。二階の部屋を悉く調べているうちに入り組んだ廊下に惑わされ方向が解らなくなる。双斧の間などは三度も出入りしている。それで右手を壁につけて歩きようやく階段に戻る。だがそれも最初のものかどうか定かではない。再び旋回する階段を昇り三階に達する。いやこは四階であろうか。そのときあのひたひたという気味の悪い音が明瞭に聞える。薄暗い廊下で迷わぬために右手を壁から離さない。人身牛頭のミノタウロスの棲む王宮ならば道順を記憶しておくの

が肝要だから 様々の壁面を飾った部屋やポーチを順繰りに通り曲りくねった廻廊を辿る 途中幾つかの不規則な階段を昇り降りする 両扉を備えた大きな部屋に入るとあの不気味な音が途断える しんと静まりかえった広い室内の奥には背凭れの付いた石膏石の玉座が厳かに措えられその背後に鉤爪を尖がらせ翼を拡げて相対する二頭の金箔のグリュフォンが睨みつけている エルドレはこの玉座の上に蒼白に燦く一對の黄金のサンダルが置かれているのに気づく

そのサンダルの甲当てには雲の模様と翼の模様が彫られている そのときこのサンダルは玉座から飛び上がり狼狽するエルドレの傍を掠めて暗い通廊の中に妖しい光を放って消えてゆく ひたひたひたという音を伴って エルドレは生命を吹き込まれたサンダルの残す微かな光茫を頼りに追い駆ける ダイダロスの建造した迷路はエルドレを奈落の淵に誘うだろう 屈曲した建物を我をも忘れて徘徊しついに一切の光が射し込まない場所に到達するのである 上下左右前後方は悉く意味をなさない 時間を眠らせるような微の激んだ臭い ぼろぼろに崩れたかのような空気 あの奇怪な光が嘲る如く点滅する 地底深く迷い込んだエルドレをこのアリアドネーの糸巻きは何処に導くというのか 寂黙の苛重の底で一角獣やらキマイラやらゴルゴーンなどの恐しい化物が舌舐りしているに違いない 黄金のサンダルは地面に降りると闇の中を青白い光でぼんや

りと照らす あゝ冥府の入口に咲くといわれるネモフィラの斑点のある紫色の釣鐘 黒い根と乳白色の花とをもつモリーリュエーの魔除けの匂いが漂う ミュルラの木が不吉な枝を伸ばしている 艶しい色をした髻粟が眠りの神ビュブノスを招いている まさしくかつて太陽神が姿を顕現させたことのない秘境 エルドレはぞくぞくする 恐怖の囁きに咬かされるとサンダルめがけて飛びかかり輝くサンダルを素足に履く 舄が更に軽くなる 耳を澄ますとあの魂をひきづるよりな險呑な音とは異なつた優しい水音が闇の奥から聞えるエルドレは宙宇を浮遊しながら打ち寄せる水音を求めて進む 漆黒の洞窟に風が戦ぐ 徐々に潮の香りがする 向こうから光が射し込む 宮殿の北の玄関は彼処に達しない 洞窟は水分を帯び始めガレー船の碇泊する入江に近い エルドレは眩い光の彼方に飛び込もうとする だが洞窟の向こうに見える海は潮が引き濡れた岩盤が露出しているのだ フネは何処へ消えたのだ 洞窟の縁を囲む暗褐色の岩が産み落とす円い光華の世界を見て眩暈する おお光の環の中核である大鷲の短剣が夥しい光輝を放つ 風化層のひとときわ青い巖を突いて